

---

---

## 編集後記

最近、impact factor などの citation index による論文の被引用度評価が盛んである。ただ、工学の分野では、新しい課題を発見し、試行錯誤を繰り返し、長い年月を掛けて課題解決に至り纏め上げた論文が、本当に世界的に新しければ、他の研究者の追従を許さないものとなる。そのため、他者は2年間程度で設備を整え追い付いて論文に纏めることも難しいが、一方で、被引用度が上がらない覚悟が必要となる。このことについて、音響学分野で有名な先生が執筆された記事から以下の文章を引用してみよう。

---

同じことかも知れないが、最後に書いておきたいことがある。

従来日本の学問は、ほとんどが西欧からの輸入で始まったものである。身の回りで発生した問題から新しい学問の道を開くのでなければ、いつまでたっても後進国であることは必定である。しかし、多くの研究者が、特に、新しい学問をやっているという研究者のほとんどが、西欧で学問としての体系が作られたものを、人よりも速く理解して、それに継ぎ足したものを論文にする。そのような仕事の方が、外国で引用される可能性は大きいかも知れない。しかし、それでいいのだろうか。

現実に発生した問題を昇華させて新しい結晶にする習慣を、われわれの周囲に作りたい。既に結晶化され抽象化さ

れた学問は美しい。美しいものにあこがれるのは、人情の常であるが、人が育てた結晶に夢中になるのではなく、混沌の中から自ら結晶を創り上げることをこそ、これからの人にやってもらいたいものである。

信号処理学会誌 Vol. 1, 2003 年掲載の城戸健一著  
「私の研究遍歴」の結びから引用

---

まさにそのとおりである。日常を変えてしまうほどの新しい概念（鉄砲、蒸気機関、自動車、電球、電話、飛行機、ロケット、潜水艦、DNA 二重螺旋構造、液晶、コンピュータ）は、みな欧米から出てきた。日本が国際的に一流国になったと考えるのは依然早いという意見もある。

研究者として研究を進めさせる原動力は、真理の探究という知的好奇心とともに、苦勞の末に、稀有な美しい成果をまさに手中に収めた喜びと、その喜びを人と分かち合うことであろう。この「超音波医学」も、そのような本当の独創的研究成果を出そうという意識・環境づくりに貢献できれば、編集者として大変幸いである。

金井 浩  
東北大学大学院工学研究科電子工学専攻  
／医工学研究科医工学専攻

---

---

超音波医学  
Japanese Journal of  
Medical Ultrasonics  
第 42 巻 第 4 号 (通巻第 288 号)  
© The Japan Society of Ultrasonics in Medicine  
——禁転載——

本体価格 2,000 円 + 税 (本誌購読料は会費に含まれます。)

平成 27 年 7 月 15 日発行  
編集者 一般社団法人日本超音波医学会編集委員会 委員長 金井 浩  
発行者 一般社団法人日本超音波医学会 理事長 工藤 正俊  
〒 101-0063 東京都千代田区神田淡路町 2-23-1  
お茶の水センタービル 6 階  
TEL 03-6380-3711  
FAX 03-5297-3744  
印刷所 大村印刷株式会社